

スタンレー・ジョーンズ来日から全国連合会発足まで



しての生涯を放棄してアメリカの郷里に帰り休養を取らなければやっていけない最悪の状態に陥っていた。彼は1年間の休養を取って再度インドに帰り仕事につくと以前の機能障害が再発してきた。彼がラクノウの教会で祈りをしていた時どこからともなく声がした。「お前は私が託した仕事に用意ができているかね」私は答えた「主よもうおしまいです。私の精魂は尽き果てようとしています」。するとその御声は「もしお前が心をめぐらしてその問題を私に帰し、思い煩わないならば私がそれを処理するであろう」と。私は直ちに答えて「今ここで約束を取り決めます」と言った。その瞬間ある大いなる平安が私の魂に入り込み、全身にいき渡った。充ち盈てる命(イエス・キリスト)が私を捕らえたのだ。』(「インド途上のキリスト」P.39～40)。その後の彼は一切の肉体的精神的な病から解放され、力と祝福に満ちて89歳まで日本やインドの民衆に宣教活動を全うしたのです。

彼の福音は思想や精神活動の人間的な働きでなく、生けるキリストご自身でありました。訪問伝道の宣べ伝える福音も特定の教派のものでも、どこかの団体の教義でもなく、それらをすべてを超越した生けるイエス・キリストご自身であります。

その後、NCCと教団の機構改革に伴って双方の訪問伝道委員会が廃止されたため、双方の有志が、1969年(NCC第16回訪問伝道全国講習会)を期に、すべての教派、

団体の連合による第1回訪問伝道全国連合会総会を開催(会長、島村亀鶴、副会長、中路嶋雄、中島彰【日本イエス・キリスト教団】、岡田 實が選ばれた。)、連合会規約を制定して新しい出発がなされ、超教派の伝道団体がスタートしたのです。ハレルヤ

こらむ

認知症になっても感謝を!

80歳を超えて終活が気になる今日この頃、曾野綾子著「長生きしたいわけではないけれど」(ポプラ社)という本に紹介されていた、「キエルケゴールの祈り」が、心に強く残りました。「主よ、この世が愚かな言葉を語り、心が苦しく、感覚が鈍り、理性が曖昧さの中に迷い、記憶が忘却の中に定かなくなっても、なお、あなたに感謝を捧げることができますように。そして、また、愛する力がなくなり、賢さを失い、誇りをなくし、暗い思いにある時でも、なお、感謝することを得させてください。」

キエルケゴールと言えば、デンマーク出身の思想家で実存主義の創始者と言われていますが、キリスト者として「イエスの招き」や「神への思い-祈りと断章」といった信仰書も書いています。すっかり感動した筆者は、さっそく、老人ホームにいるご婦人に、この「キエルケゴールの祈り」に花の絵を添えて贈ったところ、「主よ、認知症になっても感謝できますように、とお祈りしました」というご返事をいただいたのです。感謝! <喜雅>